

脂質異常症の疫学および  
心血管疾患リスク因子

小川 真里子／橋本 志歩／高松 潔

## Summary

脂質異常症の管理や動脈硬化性疾患リスクを考えるうえで、性差は最も重要な要素である。女性は閉経に伴うエストロゲンレベルの低下により、脂質プロファイルが急激に変化し、動脈硬化性疾患のリスクが急増する。それに加え、妊娠高血圧症候群(HDP)や妊娠糖尿病(GDM)だけでなく、子宮内膜症や更年期の血管運動神経症状(VMS)といった女性特有の疾患および病態と、脂質異常症や心血管疾患リスクとの関連が近年続けて報告されている。本稿では女性における脂質異常症の疫学に加え、心血管疾患リスク因子について、最近のトピックスを交え概説する。

## Key words

脂質異常症  
動脈硬化性疾患  
閉経  
子宮内膜症  
血管運動神経症状(VMS)

Mariko Ogawa

東京歯科大学市川総合病院産婦人科准教授

Shiho Hashimoto

東京歯科大学市川総合病院産婦人科

Kiyoshi Takamatsu

東京歯科大学市川総合病院産婦人科部長・教授

## 女性における脂質異常症の疫学

動脈硬化性疾患は男女ともに加齢により増加し、日本人の死因としても重要である。2019年の厚生労働省の人口動態統計<sup>1)</sup>では、男性における死因の1位は悪性新生物で220,339人であり、動脈硬化性疾患である2位の心疾患 98,210人と4位の脳血管疾患 51,768人を合わせても149,978人となり、悪性新生物による死亡のほうが多い。一方、女性においてやはり1位は悪性新生物で156,086人であるが、2位である心疾患の109,504人と4位である脳血管疾患の54,784人を合わせると164,288人となり、悪性新生物による死亡より多い。

日本人における各年齢層の血清脂質平均値の男女別推移の報告からは、総コレステロール(total cholesterol; TC), トリグリセライド(triglyceride; TG), 低比重リポ蛋白コレステロール(low density lipoprotein cholesterol; LDL-C)のいずれにおいても、閉経年齢に相当する50歳前までは女性のほうが低値であるが、その後、女性の血清脂質濃度は急激に上昇し、男性よりも高値を示すようになることが示されている<sup>2)</sup>。それ以外にも閉経に伴い、表1に示すようにアポリポ蛋白B (apolipoprotein B)は増加し、高比重リポ蛋白コレステロール(high density lipoprotein cholesterol; HDL-C)は減少することなどが知られている<sup>3)</sup>。

実際の患者数に目を向けると、厚生労働省の平成29年(2017)患者調査の概況<sup>4)</sup>によると、脂